

意見

アンビヴァレンスという
情動の動きは感じ取るしか術はない
——拙著に対する廣瀬氏の書評を読んで——

小林 隆 児*

本学会誌の前々号に拙著『臨床家の感性を磨く』（誠信書房）に対する廣瀬たい子会員の書評が掲載された（廣瀬，2018）。氏は私の主張の骨子を的確にまとめておられた。ただ、感性教育は臨床家としてはいまだ素人である院生たちには困難な課題だとの指摘があった。「著者の演習では、ビデオに映し出される母子の関係性を学生がどのように感じ、理解するか…を問うものであり、対象母子のアタッチメントタイプを確認する作業は行われていない」ゆえ「高度の専門的知識をもつ人にもみ可能な教育手法ということになりかねない」との理由からである。この疑問を受け、感性教育での私のねらいの説明の必要性に駆られたので以下述べる。

私も初期の頃アタッチメント・パターンの評価を試みたが、次第にその有用性に疑問を持つようになった。パターンの評価自体より、SSPで繰り広げられる母子交流での双方の心の動きをあるがままに捉えることこそ有用だと考えた。

その最大の理由は、それが「甘え」をめぐる心の動きを如実に示しているからである。

Crittendenによる新奇場面法の評価尺度も、その講習会に参加した氏の感想によれば、「一定のガイドラインにそって適切に親子の関係性を理解できる『眼』になるには困難を伴い、いまだその『眼』を習得してはいない」とのことである。

私は母子関係の様相を「甘え」という情動の動きに沿って観察するなかで、1歳台の子どもに「甘えたくても甘えられない」という独特な情動の動き、つまり「甘え」のアンビヴァレンスを感じ取り、それを「あまのじゃく」として概念化した。そのことによって臨床的な事例のいかなる母子関係であっても子どものこころの動きが手に取るようになってきた。ただ2歳台以降になると、独特な情動の動きは「客観的に」眼に見えるかたちでは捉えがなくなり、それに代わって前景に現れるのがアンビヴァレンスへの対処行動の数々であることもわかった。

「甘え」のアンビヴァレンスは客観的な行動観察のみでは捉えがなくなる。よって、対処行動の背後に蠢いているアンビヴァレンスを捉えなければならず、どうしても間主観的に感じ取ることが不可欠になる。そのためには、「甘え」

*西南学院大学人間科学部、大学院人間科学研究科臨床心理学専攻

(〒814-8511 福岡市早良区西新 6-2-92)

Ryuji Kobayashi: Department of Human Sciences, Seinan-Gakuin University, 6-2-92 Nishijin, Sawara-ku, Fukuoka, 814-8511, Japan

意見

にまつわる行動がどのようなものか、自らの体験を振り返る中で想起しながら、観察することが必要になる。アンビヴァレンスの強い心的状態にあって、ある状況に置かれたら人はどのように振る舞うか、自らの体験を想起するように感じ取ることが求められるのだ。

そこで私が取った方法が母子間に立ち上がるアンビヴァレンスを感じ取れるように感性を磨くことである。ただ、実施してみると、予想以上に困難であることがわかった。その理由の一つは氏の指摘する「答え（正解）のない作業」だともいえようが、最大の問題は他にあった。アンビヴァレンスを感じ取ったとしても、それに蓋をすることによって、患者自身が振り回されている無意識の問題に対して結果的に盲目になりやすいことである。

生前土居健郎は、患者のアンビヴァレンスがわかるためには、自らのアンビヴァレンスに気づくことが先決だと述べている（土居，2009）が、それは先の理由に依っている。他者理解には自己理解が不可欠なのだ。

さらに、私のいうアンビヴァレンスは、アタッチメント・パターンのCタイプ（アンビヴァレント型）でのアンビヴァレンスとはまったく異なる。アタッチメント・パターンがいかなるものであれ、そこに微妙なこころの動きとしてのアンビヴァレンスを様々なかたちで見取ることができる。アンビヴァレンスは多様な表現型を取る。それゆえ行動次元の記述によるガイド

ラインで規定することは原理的にできない。肝心なのは行動の背後に息づいている情動の動きを感じ取ることである。「甘え」文化で育った日本人であれば、「甘え」に絡む多様な言動は、自らの過去の経験に即して誰でも比較的容易に感じ取ることができる。感性教育の目標はそこにある。

最後に一言。アンビヴァレンスを素朴に感じ取るとは、「高度の専門的知識をもつ人」であればあるほど困難なことが多い。若い頃にこそ「感性を磨く」ことが求められる。なぜなら臨床の場での初期体験はその後の臨床家としての着眼点を決定づけるほどに重要な意味をもつからである（小林，2018）。

書評での最後の要望はありがたかった。アンビヴァレンスを感じ取る上で手がかりとなるヒントは沢山あると常々考えていたからである。氏に心よりお礼を述べて筆を擱きたい。

引用文献

- 土居健郎（2009）. 臨床精神医学の方法. 東京, 岩崎学術出版社.
- 廣瀬たい子（2018）. 書評 小林隆児著『臨床家の感性を磨く—関係をみるということ—』. 乳幼児医学・心理学研究, 27 (1), 55-56.
- 小林隆児（2018）. 臨床家にとっての初期体験の重み. そだちの科学, 31, 96-98.